

書名	『百年小説』		出版年 (西暦)	2008
著者・編者	ポプラクリエイティブネットワーク株式会社 編	出版社	株式会社ポプラ社	
学部・研究科	人文科学研究科		学年	1 年
<p>『百年小説』は、明治から昭和の時代までに書かれた 51 の短篇を、それを書いた作家の生年順に収めたアンソロジーだ。淡い色彩の絵が描かれた函入りで、表紙はきれいな赤い色、そして 1333 ページの本体は「本」というより「箱」というほうがしっくりくるような存在感をもつ。読まずとも、傍に置くだけで満足してしまいそうになる。しかし一度ページを開けば、満足するどころか早く次を読みたい次を読みたいと食欲になるばかりだ。</p> <p>収録された作品の中で一番印象に残ったのは、中島敦の「山月記」だった。「印象に残った」というより、「印象が変わった」と言うべきかもしれない。高校の国語の授業でこの作品を習って以来、私はずっと袁傜と李徴が叢越しに会話するのは「真夜中」だと思い込んでいたので、終末部の「既に白く光を失った月」というのがどうしても腑に落ちなかった。しかし今回読み返してみると、舞台は「朝まだ暗い中」であり、「残月の光をたよりに林中の草地を通って行った」のだった。夜明けが迫っている。時間がない、という切迫感が状況全体を支配している。それは李徴が完全な虎へと近づく焦燥と重なる。</p> <p>そして突如私は、自分の周囲に「山月記」の冒頭、つまり「隴西の李徴は博学才穎」から「甘んずるを潔しとしなかつた」までを、実にすらすらと諳んじてみせる友人がいたことを思い出した。サンゲツキ、という語が会話に出ただけでその人がさらさらと述べた、その声、その調子、それははっきり覚えているのだが、誰なのかが今もなお思い出せない。</p> <p>『百年小説』は、私と「山月記」をもう一度出会わせ、そしてぼんやりとした記憶の中の友人とも再会させてくれた。『百年小説』を百人の人が読めば、そこには百通りの再会があるだろう。小説との「初めて」の出会いも大切だが、「二度目」「三度目」の出会いのほうが新鮮なこともあるのだと、私に教えてくれた「重すぎる」本である。</p>				